
深海の星屑

紗恵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

深海の星屑

【Nコード】

N2301T

【作者名】

紗恵

【あらすじ】

大学2年の優衣は、風に飛ばされた洗濯物を届けたことから、悠守という男性に出会う。同じころ、父親の知人から見合いのような話を頼まれ、龍哉りゅうやと知り合う。悠守とお互いひかれあうようになった優衣は、龍哉を断り、悠守と付き合うことに。しかし、二人の運命は、思いもよらない方向へと向かう。

晴れのち曇り

確か今日の天気予報は晴れのち曇りだった。降水確率だって100%だったはず。

優衣は、ぽつぽつと落ちてくる雨を困ったように見上げた。

ブリーフケースを掲げて、小走りに家路に着いた。

少し走るとふと白いフェンスに引っ掛けている、マリンカラーのシャツを見つけた。

フェンスの先には、小さな庭があり、何枚かの洗濯物が風に揺れているのが見えた。

彼女は、ためらいがちにシャツを手に取り、玄関を探しに行った。

そこは古風な小さな一軒家で、庭の横に白木の扉があった。

彼女は、扉の前で深呼吸をして息を整え、ゆっくりとベルを鳴らした。

ベルの上には、藤沢 悠守ふじさわまもるという表札があった。

不安と緊張を感じながら、あのままにしておけばよかったかななどと思いつめぐらしていると、

「はい」と言う声と一緒に扉が開き、20代半ばぐらいの明るい髪色の男性が出てきた。

「あつ、あの、これ。」と手に持ったシャツを少し前に出した。

優衣の手の中のシャツに視線を落とした彼は、にっこり笑って答えた。

「僕のだね。」

優衣は少しホッとして言った。

「雨が降ってきましたよ。」

彼は、驚いて優衣の肩越しに空を見上げると、慌てて横の庭へと走って行った。

優衣は、戸惑いながらシャツを手に持ったまま、彼の後について庭へ入った。

彼は急いで庭に面した窓を開けると、干してある洗濯物を部屋の中へほり込んでいった。

屋根の下に入って、手に持っていたシャツを渡す優衣に、彼は人懐っこい笑顔でお礼を言った。

「ありがとう。雨には全く気がつかなかったよ。」

オートマタを作っていると、つい夢中になっちゃうんだ。」

「オートマタ？」

「オートマタ、からくりのことだよ。」

彼は、窓に体半分を入れると、部屋の中から何かを取り出した。

それは、自転車に乗った木製の人形だった。

彼は土台の下を触ると、優衣の目の前に差し出した。

人形の足がゆっくりとペダルをこぎ、自転車の車輪が少しづつ回り始めた。

優衣は、思わずのぞき込み、楽しそうに見入っていた。

彼は、うれしそうに優衣の様子を眺めながら、

あと色を塗れば完成なんだと言った。

そして思い出したように、優衣に聞いた。

「傘 持っていないだろ。」

彼は、戸惑う優衣に、返さなくてもいいからと、透明の傘を持たせた。

思いがけない人の優しさに触れたような、うれしいような、気恥ずかしいような、
温かな気持ちを感じながら、優衣は傘をさしながら歩いた。

晴れのち曇り（後書き）

はじめての投稿です。つたない文章ですが、楽しんでいただければ、幸いです。

懐かしい来客

家に着くと、見知らぬ革靴がきれいにそろえて並んでいた。リビングから母親が顔を出して言った。

「優衣、お帰り。今、上城かみしろさんが来られているのよ。こっちに来て、挨拶しなさいよ。」

その人は父の古くからの知り合いで、優衣の小さい時に何度か会ったことのある人物だった。

彼は、不動産業で成功し、デパートなどの商業施設にも進出している実業家だった。

幼いころの優衣は、物腰の柔らかな彼が大好きで、“おじ様”と呼び、慕っていた。

リビングのソファーには、記憶より髪の色が白くなった男性が、くつろいだ様子で座っていた。

彼は、優衣を見ると、大げさなぐらいに喜んだ。

「すっかり、大人になったね。」

彼は、目を細めて、今何歳になったのかと尋ねた。

「22歳です。常慶大建築デザイン科2年です。」

彼は、優衣が建築デザイナーを目指していることを以外だと驚いた。

そして優衣の子供のころの思い出話や、父親との学生時代のことな

どを

懐かしそうに話した。

そしておもむろに、優衣に頼みたいことがあるのだと切り出した。

「私は、3年前に引退をして、事業の全てを今年30歳になる息子に引き継いだのだが、彼が、仕事の虫になってしまっていてね。

君のような娘に会えば、仕事だけが人生じゃないと、

少しは考え方が変わるんじゃないかと思ってね。

彼に会ってくれないかな。」

承諾していいのか、躊躇していた優衣に、父親が驚いて言った。

「あの龍くんが、もうそんな歳か。お互い年寄りになったものだな。優衣、龍哉君は優良株だぞ。」

そして二人の親が意気投合し、お見合いのような話が、トントン拍子で整ったのだった。

深海の底

落ち着いた雰囲気の中の、予約された席に案内された優衣は、シックなソファに緊張しながら腰を下ろした。

初めて彼を見たとき、優衣はなぜか深海の底にいるような気持ちになつた。

神秘的でいて、惹きつけてやまない未知の世界のように計り知れない、近づけない威圧感があつた。

彼がそばまで来たとき、あまりの存在感に優衣は、はじけるように立ち上がった。

彼は優衣を見て、少し微笑みながら、

「君が親父を虜にした子だね。」

当たり障りのない話をしながら、優衣は前に座っている、

鮮麗された龍哉の様子を見ながら、

ふと胸にある疑問がわきあがってきた。

そして、ひとつ聞いてもいいですか と言つた。

「私、おじ様からあなたの話を聞いたとき、

仕事の鬼のような、ガチガチのお堅い人で、

女性にも敬遠されているって、

勝手に想像していました。

でも、あなたみたいなルックスなら、整理券でも配らなきゃいけないくらい

女の人はほつとかないと思います。

だから、なぜこのお見合いみたいな話をうけたのか、不思議なんで

す。

あなたは、おじ様が言うからって、納得しないことは従わない人だ
と思うから。」

龍哉は、面白そうに優衣を見つめ、

「確かに、僕は従順な息子ではないね。」と笑った。

そして少し考えてから、静かに答えた。

「好奇心かな。」

親父が、気に入る子がどんな子か見てみたかったんだ。」

「整理券か。いいね。それなら、君にはフリーパスを渡すよ。」

思い出したように、優衣をじっと見ながら、面白そうに言った。

優衣は、答えに窮して、困ったように言った。

「モテルって、否定しないんですね。」

なら、どうして、おじ様は私なんかと合わせようと思ったのかしら。
」

「親父は、僕の連れ歩く女が気に入らないんだよ。」

彼が連れ歩く女性は、どんな人だろうと、あれこれ思い描いていた
優衣に、

龍哉は、思いついたように聞いた。

「これから、用事がなければ、好きなところに連れて行ってあげる

よ。

どこか行きたいところはあるかい。」

優衣は、はじけるような笑顔を見せて、前に乗り出した。

「本当ですか、私、ピロウ美術館へ行きたいです。」

予想していた答えと違う、意外な場所に、龍哉は、珍しく戸惑いながら

「美術館？ 美術に興味があるのかい？」

「いいえ、展示物を見たいのではなくて、建物を見たいんです。

私の好きな建築デザイナーの、佐賀見 謙吾さんの作品なんです。」

龍哉は、父親の説明を思い出して、納得したようにうなづくと、

「美術館なんて、何年ぶりかな。」

と言いながら、伝票を手に取り、優衣を出口まで導いた。

傘とケーキ

白いフェンスの奥の、暗い窓を見て、
優衣はがっかりして溜息をついた。

バイト先のケーキ屋から帰った優衣は、
玄関の傘を見て、

「そつだ、彼に返そう」

と思ひ立ちそのまま悠守の家まで来たのだった。

しかし彼の家の明かりは消えており、まだ帰っていないようだった。

優衣が帰ろうか、待とうかと玄関の前でしばらく悩んでいると、
道の向こうから、紙袋と何個も抱えて歩いてくる人影に気づいた。

胸に抱えた荷物で顔が隠れ、歩きずらい様子を

優衣は不思議に思いながら見ていた。

優衣の前までくると、何やら取り出そうとポケットに片方の手を伸ばした。

その拍子に抱えていた袋が、ひとつ転がり落ちた。

優衣が、落ちが袋を拾い、手渡そうとしたとき、初めてその人が、
悠守だと気がついたのだった。

彼はすぐに優衣に気づき、

「君には助けられてばかりだね」

と笑った。

優衣は、彼が玄関を開けるのを手伝い、
玄関フロアーの上に紙袋を置いた。

紙袋の中には、小さな箱がいくつも入っており、
荷物は玄関いっぱいに広がった。

悠守は、疲れた腕をグルグル回しながら、
驚いて荷物を見ている優衣に、お礼を言った。

「助かったよ。これ、サンプルなんだ。今日出来上がったんだけど、
どうもうまく動かなくなってる。家で調べようと思ってね」

彼は、袋の中から箱を一つ取ると、中から、ふわふわしたものを取
り出した。

それは、眼鏡をかけたぬいぐるみだった。

彼が、おなかのスイッチを押すと、ユーモラスに動き出した。

「ダンスするモグラなんだ」

その動きがおかしくて、優衣は声をあげて笑った。

「かわいい」

楽しそうにモグラを見ている優衣を、悠守はうれしそうに見つめていた。

しばらく同じ動きをしたモグラは、突然止まってしまった。

「あー、やっぱりだめか」

悠守は、モグラを手にとると、ひっくり返したりおなかの中を覗いたり、

熱心に調べだした。

優衣は、真剣な表情の悠守を、驚嘆の面持ちで思わずじっと見つめていた。

優衣の視線を感じたのか、悠守が突然優衣に顔を向けたので、あわてて優衣は、持っていた傘を差し出した。

「あの時はありがとうございました」

「わざわざ返しに来てくれたんだ」

傘を受け取って、悠守はにっこりとした。

「それと、これ、よかったら」

優衣は、小さなケーキの箱を前に出しながら言った。

受け取るのを戸惑っている彼に、優衣はあわてて付け加えた。

「私、ここでバイトしてるんです。オーナーが、帰る時にときどき持たせてくれるんです」

悠守は、箱に張ってあるシールを見て、弾んだ声で言った。

「シャントって、駅前のケーキ屋さん？前に友達にもらって、おいしいと思ってたんだ。」

でも、買ったことはなかったんだけどね。なんか店に入っていくのが恥ずかしくってさ」

彼は何度もお礼を言い、優衣に家まで送って行くよと言った。

玄関の扉を閉めながら、悠守は思い出したように言った。

「そういえば、名前まだ言ってなかったね」

優衣は悠守を振り返りながら、ニッコリして言った。

「藤沢 悠守。 でしょ？」

悠守は、後ろにのけぞるように驚いた。

その様子を見て、優衣はクスクスと笑いながら、指さした。

「だって、表札が」

優衣が指さしたほうを見て、悠守は笑いながら答えた。

「あー、そうだった。びっくりしたよ。見える系の人かと思ってさ」

二人は、声をあげて笑った。

「で、君は？」

「倉原 優衣です」

彼女は、年齢や、大学、学科を言うと、悠守は、納得したように言った。

「だから、あの時大きなブリーフケースを持っていたんだね」

悠守は、25歳で、大学時代の先輩が始めた小さな玩具メーカーで、企画開発の仕事をしていると言った。

先ほどのモグラのサンプルで、予想はしていたが、優衣は、悠守にピッタリの職種だと思った。

優衣の家の前までくると、悠守は今度の休みによかったら一緒に出かけないかと誘った。

あまりにさりげない誘い方で、優衣は構えることなく、

「よろこんで」

とうれしそうに微笑んで答えた。

傘とケーキ（後書き）

ずいぶん久しぶりの投稿になってしまいました。

これからは、間をあげないようにしたいと思いますので、よろしく
つたらおつきあいください。

チーム スファロー

大学のカフェテラスで優衣は、友人の瑞希に悠守と初めてすごした休日のことを話していた。

「河川敷で、スポーツカイトをしたの。」

彼、スファローってクラブに所属していてね、月1回集まって練習するんだって」

「スポーツカイト？ 凧上げのこと？」

「普通の凧とは違って、2本以上の糸で操って、急降下とか回転とか、いろんな動きをさせるの。」

チームで合わせて動かすと、飛行機のアクロバットショーみたいで、すごい迫力なのよ」

「ってことは、2人きりのロマンチックなデートってわけじゃなかったんだ」

「でもクラブの人たち、すごくいい人たちだったよ。」

クラブ代表の大輔さんなんて、最高に面白い人だったし、大輔さんの彼女の、美咲さんはほんと素敵なお人だったし。すごく楽しかったんだから」

瑞希は諦めたように笑って、

「で、その河川敷の土手で、夕日でも見ながら告白されたとか」

優衣は、目を大きく見開いて、顔を赤らめて慌てふためいた。

「うそっく。聞いてられない」

瑞希は笑いながら、上を向いた。そして思い出したように聞いた。

「じゃ、上城グループの御曹司とはもう会わないの？

彼のどこがダメだったの？」

「彼は、完璧。大人だし、女性が憧れるすべてを持ってると感じ。ただ、悠守といると私、とても自然でいられるの。」

それに、彼が見せてくれる世界が、たまらなく楽しくて、うれしくて」

「人を好きになるのに、理由はないってよく言うけど。でも、御曹司はもったいないな」

瑞希は、大げさに溜息をついた。

「瑞希も悠守に会えば わかるよ」

「じゃ、今度、亮平誘うから、ダブルデートしようよ」

「うん。悠守に言ってみる」

優衣は嬉しそうにほほ笑んだ。

「そういえば、優衣、これから用事があるって、言っていなかった？」

瑞希は時計を見ながら聞いた。

「龍哉さんに会ったの。」

悠守のこと報告しておいじろと思っ
て」「

「きっちり断ってからじゃないと、前に進めないってことですよ。

優衣らしいわ」

「今龍哉さん、とっても忙しいみたいなんですけど、時間を作ってく
れて。」

だから遅れちゃいけないから、そろそろ行くね」

「行ってらっしゃい。私は最後の講義があるからここだね」

二人は手を振って別れた。

チーム スファロー（後書き）

なんとも生活感のあふれる出会いをした優衣と悠守の二人ですが、暖かく見守っていただければと思います。

パーフェクション

龍哉は、待ち合わせの場所に少し遅れてやって来た。

優衣は、言いにくそうに悠守の話をした。

龍哉は、意外な優衣の話を少し戸惑いながら、静かに聞いていた。

何度も謝る優衣に、龍哉は、笑いながら言った。

「交際を申し込む前に断られたのは、はじめてだな」

「ごめんなさい。おじ様の手前、きっちりしておかないといけないと思って」

「君は律儀な子なんだね。」

親父の人を見る目もなかなかだとわかってよかったよ」

彼はかすかにほほ笑んで、続けた。

「本当は、この仕事が一段落したら、君をお礼の食事に誘おうと思っていたんだ」

「お礼？」

「実は、3年後オープン予定の総合複合施設の建設計画があつてね。その建設デザインを

佐賀見 謙吾氏に任せることにしたんだ。
君に教えてもらって、興味を持ってね。」

優衣は眼を輝かせた。

「君のおかげで、新しい角度からプロジェクトを進めることができそうだよ」

時計に目を落として龍哉は、

「悪いね、これからまたミーティングがあるんだ」と、立ち上がった。

彼は少し優衣を見つめてから、静かに背を向けた。

パーフェクション（後書き）

龍哉は、ここでしばらくお休みです。
後半でまた登場しますので、お楽しみに。

アクアマリンの指輪

優衣と瑞希の計画したダブルデートは、すぐに実現した。

悠守を見た瑞希は、優衣を肘でつつきながら、小声で言った。

「優衣って、悠守君の容姿のこと全然言わないから、勝手にイケてないと思ってたけど、なんだあ、爽やかなイケメンじゃないの」

悠守と瑞希の彼の亮平は、すぐに打ち解けて、それから何度も四人で、出かけるようになった。

悠守は、優衣をいろんなところに連れて行った。それは、見たことがないような景色が見える場所だったり、行ったことのない海だったりした。

ある時は、優衣が自転車に乗れないと話した、次の約束の日、どこからか借りてきた自転車を持ってきて、

「今日は自転車講習会だよ」とにっこり笑った。

「ぜったい乗れないよ」

尻込みする優衣の頭を、軽くコツンとして悠守は、真剣な顔で言った。

「最初からそんなこと言ってたらダメだろ。やってみなくちゃ、わからないじゃないか」

優衣の背中をやさしく押して、サドルに座らせると、

「絶対離さないから、信じて前だけ見てろ」

そう言つと悠守は、後ろを持って、前に押した。

何度か擦り傷を作つて、一人で少し乗れるようになると、悠守は、優衣の頭を大きな手で、くしゃくしゃにしなから、自分のことのように喜んだ。

「優衣にできないことなんて、ないんだよ」

そう言つて、優衣を子供のように抱き上げた。

優衣の初めての誕生日の日には、悠守はアクアマリンのシルバーの指輪を贈った。

「アクセサリーの店で、ものすごい数の中から選ぶのに、ずいぶん悩んでさ、何時間もかかったよ。むちゃくちゃ、恥ずかしかった」

恥ずかしそうに悠守が箱を渡した。

優衣は、照れる悠守に指輪をはめてもらい、うれしそうに指輪を見つめていた。

「ありがとう。うれしい」

何度も何度もお礼を言う優衣に、悠守は嬉しそうにほほ笑んだ。

優衣は彼のそのやわらかな笑顔が、好きだった。

なによりも、包み込んでくれる彼のあたたかい眼差しが好きだった。

彼女をフツと覗き込むしぐさや、頭をくしゃつとなでてもらうのが、
たまらなく好きだった。

彼女のすべてを受け入れてくれているような、
満たされた思いを感じることができた。

何気ない彼の一言に、たまらない幸せを感じたり、
つないだ指先から感じる彼の気持だったり、

優衣を見つめる瞳の奥の優しさを感じることが、
何よりも神聖な感情だと思った。

サーカスのオルゴール

優衣は、大学3年の夏休みに瑞希と、少し早い卒業旅行にドイツに行くことにした。2人は、古城めぐりや、ライン下りを楽しみ、旧市街の古い石畳の街を散策したりした。

優衣はあるアンティークショップに目がとまり、ショーウィンドーに飾られている、大きなオルゴールに吸い寄せられた。

それは、サーカスのテントを模したもので、中には綱渡りをする猿や、一輪車に乗るクマなどがいた。

店主が、ショーウィンドーを覗き込む優衣に気がつくのと、人懐っこい笑顔で手招きをして、2人を店の中に招き入れた。

店主が、オルゴールをテーブルへ運び、ねじを回した。

アヴェマリアの曲が澄んだ音で流れだし、動物たちが、コトコトと動き出した。

「こんな大きなのをどうやって持って帰るの」

心配する瑞希に、優衣は、

「やってみなくちゃ、わからないでしょ」

とにつこり笑って、店主にそのオルゴールを箱に詰めてもらったのだった。

優衣は、オルゴールの入った箱を慎重に腕に抱えながら、帰りの飛行機に乗り込んだ。

空港の到着ロビーには、悠守と亮平が迎えに来ていた。

出口から出てきた優衣は、悠守の姿を見つけると、嬉しそうにほほ笑んだ。

優衣たちの後ろから出てきた小さな男の子が、

「パパだ」

叫んで駆け出し、優衣の体に勢いよくぶつかった。

その拍子に、あれほど大切に抱えていた、オルゴールの箱は、優衣の腕の中をすり抜けスローモーションのように、ゆっくりと床へ落ちて行った。

優衣は、床の上に散らばった、オルゴールの破片をただ茫然と見つめていた。

「だいじょうぶか」

悠守はすぐに優衣のそばに来て、心配そうに顔を覗き込んだ。

「悠守にびつたりのお土産を見つけたのに」

優衣は涙ぐみながら、震える声で言った。

悠守は、床にしゃがみ込んで、壊れたオルゴールを丁寧に箱に入れ、周りの破片も一つつつ拾い集めた。

そして箱のふたを静かに閉めると、大事そうに箱を抱えて優衣のそばまで来て、やさしく言った。

「優衣、ありがとう。すごくうれしいよ」

そして片方の手を伸ばし、優衣の顔を包むと、親指でそっと涙を拭いて、優衣の顔を覗き込んだ。

「もう泣くな」

優衣は、悠守の笑顔を見て、つられるように少し笑った。

アンティークショップ

優衣たちが、ドイツから帰ってから、数週間が過ぎたころ、悠守は、見せたいものがあるからと、優衣を連れ出した。

人通りの少ない裏路地の一角にある小さなアンティークショップだった。

スタンドグラスのはめ込まれた古い扉を開けると、彫刻の施された家具や、美しい模様のタイルがはめ込まれたテーブルなどが、所狭しと置いてあった。

小さなガラス窓の横に備え付けの棚があり、その棚の中には手の込んだオートマタ（からくり）の人形がいくつも並んでいた。

店の奥から、店主らしい年を取った一人の男性が出て来た。

「悠守君、いらっしやい。お待ちしていましたよ」

穏やかな笑顔で言い、優衣に視線を向けてつづけた。

「あなたが、贈り主の優衣さんですね。さあ、こちらにいらっしやい」

彼はカウンターの後ろの棚の中から、見覚えのある箱を取り出し、カウンターの上に乗せた。

中から、優衣がドイツで見たときと変わらない、サーカスのオルゴールが出てきた。

彼が、ねじを回すと、弾んだように曲が流れだし、動物たちが、始めてみた時と同じように動き出した。

優衣はこぼれるような笑顔でオルゴールを見つめた。

悠守は優衣に言った。

「この人が、オーナーの三木さん。僕のオートマタの師匠なんだ。無理を言って修理をお願いしたんだよ」

「とても難しい修理でしたが、幸せな気持ちにさせてもらいましたよ」

笑顔で、遠くを見るようにつぶけた。

「このオルゴールには、優衣さんの悠守君への気持と、悠守君の優衣さんへの思いが詰まっていますから、私まで幸せな気分になりましたよ。家具や小物たちは、その物はただの物でしかないのですが、作り手の思いであったり、使う人の思いがあったり、それぞれの思いを刻み込んで、世界でたった一つしかない価値のあるアンティークになるんです。それぞれに歴史があるのです。」

そのひとつひとつの思いや、歴史が、私にはたまらない魅力だね。それが、私がこのアンティークショップを半世紀近くも

「続けている理由ですよ」

優衣と悠守は、照れくさそうにお互いを見つめ合って、オルゴールを眺めていた。

宣戦布告

街がクリスマスのイルミネーションに彩られる頃、
優衣のもとに一通の封書が届いた。

上城コーポレーションと社名の入ったものだった。

中には、パーティーのチケットが2枚入っていた。

それは、優衣が最後に龍哉にあった時に聞いた、
総合複合施設パーフェジオンの着工祝賀セレモニーの案内だった。

印刷された案内の最後に、力強い文字で、ぜひ悠守君と一緒にと
手書きされてあった。

優衣は数日思い悩んだ末、悠守にためらいがちに案内状を見せた。

少し見てから、悠守は、あっさりと優衣に言った。

「優衣が少しでも行きたいなら、僕はかまわないよ」

優衣は、悠守のスーツ姿を初めて見て、

「すてき」

と何度も言って、

「これからいつもスーツを着て来て」

悠守を赤面させて、困らせた。

龍哉が、二人に気付いたのは、二人が、会場に入ってしまった時だった。

パーフィジョンの設計模型を熱心に覗き込みながら、楽しそうに二人で話しているときに、後ろから声がした。

「優衣、来てくれたんだね」

一年以上顔を合わせていなかった龍哉は、以前にも増して威厳を感じさせるような威圧感があった。

優衣は、招待のお礼と、お祝いを言うと、悠守と龍哉それぞれを紹介した。

「一度お会いしたいと思っていました」

龍哉は、悠守を見据えながら言い、右手を差し出した。

悠守はなれない様子で、手を伸ばした。

悠守が、龍哉に顔を向けて、短い握手をしたとき、悠守は、一瞬怪訝そうに眉をひそめた。

しかし、すぐに落ち着いた口調で挨拶をした。

「はじめまして」

龍哉は、静かにうなずくと、優衣に視線を向けて、紹介したい人がいると言って、彼女を会場の奥へと連れて行った。

会場横のロビーで、ネクタイを少し緩めてソファに座っている悠守を

優衣はやっと見つけた。

優衣は、興奮した口調で、建築デザイナーの佐賀見謙吾を紹介してもらったと言った。

そして、今度、龍哉に事務所に連れて行ってもらえることになったと、

嬉しそうに話した。

声を弾ませて話す優衣の様子を、

悠守はやわらかい表情で見つめていた。

龍哉に佐賀見の建築事務所に連れて行ってもらった日は、優衣にとって将来を左右する重要な一日になった。

佐賀見は、優衣の熱心な様子や、聡明なさをうかがえる受け答えに感心し、

龍哉の口添えもあって、優衣に事務所にバイトとして勉強しに来るかと思し出たのだった。

そして将来、正規のスタッフとして採用しようと思つたのだった。

優衣からその話を聞いた悠守は、心から祝福し、彼はすごい人なんだねと言った。

悠守の様子がおかしくなり始めたのは、年が明けてしばらくたった頃だった。

優衣の電話にほとんど出なくなり、メールの返事も返って来ないことが多くなった。

やっとつながった電話では、優衣の誘いを、忙しいからと断り、まったく会えない日が、何週間も続いた。

言い知れない不安にさいなまれながら優衣は、彼は今忙しいから、と自分に言い聞かせるように、建築事務所の新しいバイトで気を紛らわせた。

宣戦布告（後書き）

龍哉さん、少しだけ再登場です。
本格的な登場は、あと少し先です。

カナダ

2月に入って、優衣はやっと悠守に会えることになった。
優衣は、心躍る様な気分で行った。

二人は、展望台がある公園へ行った。

その日は、暖かな日差しが差す穏やかな天気だったが、
吹き抜ける風は、切るように冷たかった。

二人は、凍える風にあたりながら、
静かな海の白波を眺めていた。

優衣は、口数の少ない悠守にたまらない不安を感じながら、
その気持ちを押し隠して、明るくふるまっていた。

彼は、目の前の景色などまったく目に入っていないようだった。

なにやら思い悩むように、視線を足元に向けている。

しばらく押し黙った後、
ようやく口を開いた。

彼は、ポツリと、転職することにしたと言った。

優衣は、今まで会えなかった謎が解けたような、
ホッとした気持ちがあわき上がってきた。

悠守の新しい会社は、トイ・ボックスという

カナダに本社がある外資系の会社だった。

最近日本に進出してきた、玩具メーカーだという。

悠守は、ためらうように優衣に言った。

「カナダに行くことになった。

5年は帰れない」

優衣は、彼の言葉を頭の中でゆっくりと繰り返し、必死に動揺する気持ちを抑えようとした。

そして、シヨックを受けながらも、

前向きに考えようと、快活に言葉を並べた。

「5年は長いけど、私、メールするし、電話もするね。それに絶対会いに行くから」

悠守は、下を向いて、苦しそくに唇をかんだ。

そして喘ぐように声を出した。

「別れよう」

優衣は、その言葉の意味が理解できずに、聞き返すこともできず、ただ押し黙って悠守を見つめていた。

悠守は、悲痛な面持ちで優衣をまっすぐ見つめて、今度は、ゆっくりとかみしめるように言った。

「優衣、別れよう」

優衣は、急に急き切ったように早口で聞いた。

「どうして？遠距離に自信がないから？

そんなのやってみないと分からないじゃない。

そういつも悠守が言ってたじゃない」

悠守は、また視線を下に落として、

苦しそうにとぎれとぎれにつぶやいた。

「ごめん。優衣」

「僕じゃ、ダメなんだ」

悠守の思いつめた表情に、

彼の堅い決意を感じた優衣は、

恐怖に似た絶望を感じ、

震えながら後ずさった。

「うそでしょ。そんなの信じない。

ぜったい信じないからっ！」

優衣は、涙声で叫ぶと、

奥に続く散歩道に向かって駆け出した。

真夜中の約束

瑞樹は、タイヤをきしませて車を駐車場に止め、近くで待っていた、悠守のもとへと駆け寄った。

「優衣が、帰りがらないってどういいうこと？」

「何度か、声をかけたんだけど、泣きじゃくってだめなんだ。もう2時間になるのに」

「いったい、何があったの？」

「別れようって言ったんだ」

苦しそうに悠守が言った。

「うそでしょ」

問い詰めようとした瑞樹は、思いとどまり、

「とりあえず、今は優衣を私の家に連れて帰る。後で連絡するから」

疲れ切った様子で立ち尽くす悠守を置き去りにして、瑞樹は、奥へと続く道を急いだ。

散歩道の途中にあるベンチに、優衣は悲しみに沈んだ様子で一人座っていた。

涙はもう流していなかった。

ただ茫然と目の前の景色を見つめているようだった。

瑞樹は、ホツとした表情を浮かべてから、

優衣の方に近づいて行った。

優衣の前にしゃがみ込むと、冷え切った手を握りしめた。

「優衣、帰ろう」

優衣は、ぼんやりした目で、瑞樹を見つめた。

「瑞樹、どうしてここに」

そして、さみしそうに微笑んだ。

「そうか、悠守か。悠守って、こんな時でもやさしいんだ」

瑞樹は、優衣の肩を抱えてベンチから立ち上がらせた。

真夜中を過ぎた頃、真つ暗なアパートの階段を

瑞樹は音をたてないように静かに降り、

通りの端にいる悠守のもとに近づいて行った。

彼は、昼間と同じ服装で、

疲れきって憔悴しているようだった。

「今眠ったところ」

「すまない。君にまで迷惑かけて」

悠守は、ぐったりと頭を下げて、
悔しそうにつぶやいた。

「つらくない別れなんてないって
分かってるつもりだけど、
優衣を傷つけたことが、
たまらなく悔しいんだ」

苦痛に満ちた表情の悠守を見て瑞樹は、
諦めたように溜息をついた。

「もしかしたらよりを戻す説得ができるんじゃないかって
期待してここに来ただけで、どうも無理みたいね」

悠守は、気弱な笑みを浮かべた。

それから少しの間下を向いて、目を伏せていた。

やがて悲しげな表情で瑞樹に顔を向けた。

彼はゆっくりと頭を下げ、

静かに背を向けて歩き出した。

瑞樹は、その悲しみに沈んだ後ろ姿を見て、
思わず呼びとめた。

「自暴自棄になっちゃダメよ」

悠守は、しばらく立ち止っていたが、

ゆっくりと振り返った。

彼は、真剣な顔でまっすぐ瑞樹を見て、誠意がこもった声で言った。

「約束するよ。優衣を悲しませるような生き方はしない」

そして、足元に視線を落としてから、小さく微笑んで続けた。

「君がいると、僕は安心して日本を離れらるよ。優衣をよろしく」

瑞樹は、暗闇に消えていく悠守の後ろ姿を見つめながら、小声でつぶやいた。

「あんなに優衣のこと大切に思いながら、別れるって、どうしてなんだろう」

デパーチャー

3月の最初の休日ということもあって、飛行場の人ごみもまばらだった。

悠守が日本を離れる日に、
ちゃんとさよならを言った方がいいと、
瑞樹がためらう優衣を
ひっぱるように飛行場に連れて来た。

国際線の出発ロビーで、
たくさんの友人に囲まれている悠守を
二人はすぐに見つけることができた。

その友人の中には、優衣がスポーツカイトで
何度も会ったことのある耕太や、
美咲たちもいた。

優衣は、友人たちと談笑する悠守の姿を、
今まで感じたことのないほど遠い存在に感じた。

私は、彼を忘れることができるのかしら

優衣はただ漠然と、そんなことを考えながら、
悠守を見つめていた。

悠守は、少し離れてたたずむ優衣に気付くと、少し驚いた顔になって優衣を見つめた。

友人たちも優衣に気付くと、

それぞれが別れの言葉や激励を口にして、そろそろと立ち去って行った。

数人が優衣にも挨拶し、肩をポンと叩いて行った。

優衣はゆっくり悠守に近づいて行った。

悠守は、穏やかな表情を見せた。

「優衣、来てくれたんだ」

優衣は、うなずいて、少し微笑んで見せた。

「元気か？ちゃんと食べてるか？ちゃんと寝られてる？」

心配そうに尋ねる悠守に、優衣はクスツと笑って言った。

「離れて暮らす親が言うセリフみたい」

彼は、そうだなと言って一緒に笑った。

悠守は、しばらくの間、何も言わずに目を伏せて、そして悲しげな真剣な顔になって、優衣をまっすぐに見た。

「優衣、幸せになれ。ぜったい幸せになれよ」

優衣は、その誠意のこもった言葉に、胸がキュッとしばまって、目に涙がにじんできた。

優衣はぐっと涙をこらえて、少し微笑みながらゆっくりとうなずいた。

悠守は、少し離れて待っている瑞樹に顔を向けると、静かに頭を下げた。

彼はしばらくの間、優衣をじっと見つめたあと、ゆっくり背中を向けて、歩き出した。

優衣は、突き動かされたように悠守の名前を呼んだ。

おもむろに振り向いた悠守に、優衣は目に涙をためながら、声を振り絞るように言った。

「私、あなたに会えてよかった」

悠守の少し驚いた表情が、ゆっくりと満面の笑みに変わっていった。

それは、優衣が一番好きな笑顔だった。優衣はずっと見ていたと思った。

せめてこれから出会うだろうつらい時に、

この笑顔を思い出せるように、
記憶にとどめておけるようにと、
願いながら見つめていた。

やがて、悠守の後ろ姿が、涙でかすんで見えなくなってしまうた。

優衣は、彼がなぜ別れを選んだのかという理由を
きつといつになっても理解できないだろうと思った。

ただ、相手の幸せを心から願いながら、
別々の道を歩まなくてはならない生き方があるのだと、
このとき、初めて知ったのだった。

デパーチャー（後書き）

数ある作品の中から、選んでここまで読んでくださった皆様、
本当にありがとうございます。

そして、お気に入りに登録してくださった方々、
ここから感謝しています。

後半もどうぞおつきあいくださいませ。

外せない指輪

大学の最終学年に入って、ゼミの講義や課題、そして建設事務所でのあたらしいバイトで、

優衣は忙しい充実した毎日を送っていた。

パーフェジオンの建設が進んでいて、

龍哉は、よく事務所に顔を出すようになった。

彼は、優衣が帰る時間になると、送っていくよと言って、

家まで送ってくれることがあった。

それは、事務所から優衣の自宅までだったり、大学から事務所だったり、

ただ車で送ってくれるのだった。

少しの時間を見つけては、

優衣の送迎をしてくれるのだ。

梅雨のころ、その日も龍哉は、事務所から家まで送ろうと言った。

車に乗り込んだとき、

優衣はたまりかねて、龍哉に言った。

「こんなタクシーみたいなこと、やめて下さい。私、恐縮してしまいます」

龍哉は、優衣を覗き込むようにじっと見て、

「なら、今夜は食事につき合ってもらおうか」

とニヤツと微笑んだ。

彼の選んだレストランは、

夜景の見わたせる最上階のフランス料理の店だった。

優衣は、星屑のように広がる光の帯を
静かに眺めていた。

優衣の様子を満足げな表情で見つめていた龍哉は、
ふと優衣の左手に視線を止めた。

その薬指には、アクアマリンの指輪が光っていた。

龍哉は、いきなり黙って、優衣の左手をつかむと、
自分の方に引き寄せた。

優衣は、驚いて、狼狽した表情で龍哉を見た。

彼は指輪に視線を落とし、
少し沈黙した後、
ひどく冷たい表情で優衣に聞いた。

「悠守君と別れたと言ったね。違うのか」

優衣は慌てて、手を引っ込めようとしたが、龍哉は、一段と強く優衣の手首をつかんだ。

優衣は、諦めたように指輪を見つめながら、消えるような小さな声で答えた。

「どうしても外せないんです。今まですつとはめていたから」

彼は、唐突に優衣の手を離すと、すこし穏やかな目で優衣をまっすぐ見た。

「優衣、今の君を彼がどう思うか、考えたことがあるか。彼にもらった指輪を、まだはずせない君を彼が喜ぶとでも」

優衣は目を見開いて、ショックを受け、唇を嚙んで下を向いた。

少し黙って考えた後、沈んだ声で言った。

「わかっているつもりです。

でも、もう少し時間が必要なの」

その時、優衣の中で、悠守が最後に言った

「幸せになれよ」

という言葉が、鮮明に聞こえたような気がした。

「優衣、幸せになれ。ぜったい幸せになれよ」

優衣は、窓の外をぼんやり眺めながら、
悠守が言ってくれた言葉を
何度も何度も心の中で繰り返していた。

物思いにふける優衣を
思惑気な顔で見つめながら龍哉は、
一人小さくつぶやいた。

「強引な方がいいんだな」

パールの指輪

初夏の頃、龍哉は、突然優衣を飛行場に連れて来た。そして、飛行機で遠く離れたラベンダー畑へと連れて行った。

いつだったか、優衣が好きな花はラベンダーと話したことがあり、有名なラベンダー畑へ連れて来てくれたのだった。

あたり一面に広がる、紫や、赤、黄色の帯に、心が解き放たれたように、優衣は自然と笑みをこぼしていた。

「その笑顔が見たかったんだ」

そう言うと、龍哉は優衣の左手を手を取った。

優衣の薬指にはまっていたアクアマリンの指輪を、なにも言わずに外すと、戸惑う優衣をしり目に、その指輪を胸のポケットに落とした。

片方の手をサイドポケットに伸ばすと、

小さな箱を取り出した。

中に入っていた指輪を、

ゆっくりと優衣の薬指のはめた。

その指輪は、真珠がちりばめられた綺麗な指輪だった。

優衣は、当惑したように指輪を見つめていた。

「次に贈るのは、ダイヤだよ」

「ダイヤ？」

「結婚を前提にということだ」

いともあっさりと答える龍哉に、

優衣は、慌てふためいた。

「でも、私、」

“でも”は、言うな。今は聞きたくない」

優衣の言葉をさえぎり、龍哉は、きっぱりと言った。

少し穏やかな目を優衣に向けるて、ゆっくりと言った。

「君の笑顔がずっと見たかった。

そのためには、どんなことでもするつもりだ」

日が少し傾きかけた頃、二人は近くのカフェで、

花の絨毯を見渡せるカウンターの席に並んで座っていた。

優衣は目の前に広がる花の色が、時間とともに変化する様子を
楽しそうに眺めていた。

龍哉は、おもむろに優衣の耳もとに顔を寄せて囁いた。

「今夜、この近くにホテルを予約してある」

優衣は、持ちかけたカップを思わず落としそうになった。

赤面しながら、慌てふためいて早口に言葉を並べた。

「えっ、そんな、私、突然言われても、あのっ、困ります。だって、あの、何の用意もしてないし、それに、あのっ」

優衣の、どもりながら慌てて言い訳する様子に、龍哉は、声を上げて笑いだした。

「冗談だよ」

えっ？からかわれたの？

優衣は少しホツとした表情を浮かべた。

そう言えば、龍哉のこんな楽しそうな笑い声を初めて聞いたのでは、と思った。

「今度は、君の方を先に予約するよ」

まだ笑いがおさまらない様子の龍哉が、面白そうに言った。

「からかわないで」

優衣は、少し怒ったように、テーブルに飛び散った滴を丁寧に拭くふりをしていた。

サンセット（前書き）

最後のセリフ付け加えました。

龍哉の一人称を変えました。

“僕”は、初対面だったために使いました。

サンセット

「龍哉さん、車何台持つてるんですか？」

二人は、サンセットクルーズで、船のデッキの上にいた。

龍哉は、手摺を背にゆったりともたれかかっていた。

優衣は、ほとんど沈みかかった夕陽を見ながら、ふと前々から気になっていたことを聞いたのだった。

優衣が乗せてもらう車が、しょっちゅう違ったからだ。

ほとんどが外車で、雑誌に載っていきそうなスポーツカーだったり、重厚なクラシックカーだったりした。

「ん？3台かな。仕事用も入れれば、5台」

「しゅっ、5台？」

そっけなく答える龍哉に、優衣は啞然と口をつぐんだ。

龍哉は、首を傾けて優衣を見て、右手を伸ばした。

大きな手で、優衣の両ほほを軽くつかんで、

優衣の顔を自分の方に向けた。

「車みたいにな、女も数人いると考えてるのか」

あまりに近い龍哉の顔に、優衣はどぎまぎして、彼の手を振り払おうとした。

龍哉は、その優衣の手を握りしめると、今度はもつと近づいてきて、耳元で囁いた。

「心配するな。今は、優衣だけだ」

彼の甘いセリフや、ふれあい方に

どうしてもまだ慣れない優衣は、

あたふたと落ち着かない様子で、

思いついたことをぼそぼそと口にした。

「今はって、今まで、何人と付き合ったことあるんですか？」

龍哉は、優衣の手を離すと、探るような目で覗き込んだ。

「優衣は？今まで何人と付き合ったことがある？」

不意に問いかけられて、優衣は考え込んでしまった。

「えっと、高校1年の時の信ちゃんは、あれは付き合ったことになるのかな。」

うーん、一人で、あとは、えっと」

クックと龍哉が、笑いだした。

ハッと頭をあげて、優衣は龍哉を見た。

“あーまた、からかわれたんだ、私。”

優衣は大きく息を吸い込み、小さく溜息をついた。

「優衣、君のその素直なところが、たまらなく好きだよ」

龍哉は、優衣の頭に手を載せて、覗き込んだ。

「優衣、大切なのは、今だ。

今、優衣にとつて一番が俺ならそれでいい。

過去は、どうでもいい

君の今、それから未来だけでいい」

龍哉は、まるで優衣の心の中まで見透かすように、
まっすぐ優衣の目を見つめて、ゆっくりと言った。

優衣は魔法にかかったように、
言葉が何も浮かんでこなくなり、
ただ彼を初めて見るように見つめていた。

優衣の頭の上の龍哉の手が、優衣の首筋に降りてくると、
龍哉の顔が、ゆっくりと優衣の顔に近づいていった。

サンセット（後書き）

悠守の時は、手を握るシーンさえも描かなかったのに、龍哉の場合、成り行き上避けて通れなくなっていました。でも、この後の詳細は、皆様のご想像にお任せいたします。

止まらない涙

龍哉のそばにいれば、すべてが完璧に進んでゆき、優衣は、だたそれを受け止めていればいいだけだった。

傷ついて疲れ切っていた優衣にとって、それはある意味、とても居心地のよい安心感だった。

彼女はその安心感が、幸せなのだと思った。

悠守といった時に感じた、体の底から湧き上がってくるような喜びや情熱は、今の穏やかな幸福と全く変わらないと思った。

それは自分が大人になったからだ。

はじけるような恋が終わって、きつとこれが、大人の恋愛なのだと思った。

優衣が、龍哉にダイヤのエンゲージリングを贈られたのは、年が変わった1月だった。

二人の両親がそろったの食事会で、龍哉は青いビロードの箱を優衣に渡したのだった。

その時になって、この席が、婚約のために用意されていたことに、優衣は初めて気が付いたのだった。

それまで、両親のそろった食事会が何度かあったので、優衣は何も気付かなかったのだ。

龍哉は、箱から指輪を取り出すと、静かに優衣の薬指にはめた。

二人の両親が大喜びしているこの結婚は、なにより自分にとって幸せなんだと優衣は思った。

これが、自然なことなんだと思った。

幼いころから結婚にあこがれていたことや、何人かの友達の結婚話を夢見るようにうっとりとして聞いていたことをふと思い出した。

それでも、指に光る大きなダイヤモンドを見つめていると、なぜか自分には、不釣り合いの物に思えてくるのだった。

優衣の目から涙があふれ出て、ダイヤモンドの上にこぼれ落ちた。

後から後から、こぼれ落ちる涙を、止めることができなくなった。

優衣は、その涙の訳をどうしても見つけることができずにいた。

説明できない涙に、優衣自身が、ひどく動揺していた。

龍哉は、少し戸惑いながら、両親に言った。

「彼女には今日のことを話していませんでした。ちょっと驚かせてしまったようです」

彼は、優衣の前に膝まづくと、彼女の手を両手で包み込んだ。

「優衣、君に黙っていて悪かった」

優衣は、龍哉に力なく微笑んで見せた。

「優衣、お化粧を直しに行きましょう」

優衣の母親が、その場を収めるようにそう言って、優衣の背中を押して、化粧室に連れて行った。

そしてパウダールームの椅子に優衣を座らせると、心配そうな顔をして言った。

「優衣、私たちは、この結婚に大賛成だけど、もし少しでもあなたに不安があるなら、お断りしていいのよ」

優衣は、首を振って、大丈夫と笑顔を見せた。

「本当にびっくりしただけ。もう少し時間がほしかったの。私、この結婚が幸せだって思ってる。幸せになれるって、信じてる」

母親は、穏やかな表情で優衣を見つめた。

「優衣が本当にそう思えるなら、何も心配ないわ。」

でも少しでも不安があるなら、いつでも言っっちゃおうだね」

「ありがとう」

優衣は涙を拭いて、小さく微笑んだ。

海を越えて

カナダは、英語圏とフランス語圏があり、悠守の職場は、英語とフランス語が、半々に飛び交っていた。

悠守は、フランス語はもちろん、英語もほとんど話せなかった。

彼が、まだ新しい環境に慣れていない頃、

別フロアで、日本人らしい青年を見かけた。

悠守は、片言の英語で彼に話しかけた。

彼は、隼人という名前の日本人留学生だった。

彼は、近くの大学に通いながら、将来カナダ永住を希望し、インターンシップとしてここで職業体験をしているのだと言った。

悠守は、彼に専門用語の英語を教えてくれないかと頼んだ。

隼人は、一目で悠守に好感を持ち、快く快諾した。

隼人は、時間を作っては、悠守の家庭教師役に徹した。

そして、英語以外にも、カナダの観光地だったり、アウトドアだったりを楽しんだのだった。

隼人は、「パーティーをしよう」と言っでは、

何人も友人を連れて、悠守の借りている部屋へ押し掛けたり、他の集まりに悠守を連れて行ったりのだった。

ある日、悠守の部屋で、勉強が終わって、ビールのを開けている時だった。隼人は、どうしてもわからない事があると悠守に言った。

「前に、恋人はいないって言っていたよな。なのに、俺の連れてくる美女たちに、

“何ら興味ありません”って顔はなんなんだ？」

「やっぱりそうか。」

やたら連れてくるからさ、何か企んでいると思ってたよ」

悠守は、椅子の背にもたれながら、苦笑いした。

「はぐらかすなよ。」

ほんとは、遠距離恋愛でもしてるのか」

「いや、本当にいないよ」

悠守は、諦めたように肩をすくめた。

「忘れられない人が、いるんだ。」

別れてもう1年になるというのに」

悠守は、ポツリポツリ、追憶にふけるように優衣のことを話した。

そして、おもむろに携帯を開くと、あるメールを、隼人に見せた。

それは、瑞樹が悠守に送った、
優衣の婚約を知らせるメールだった。

優衣に内緒で、瑞樹はときどき悠守に、
優衣の近況などを知らせていたのだった。

そこには、6月に結婚することになったこと、
指からはみ出しそうな婚約指輪、
豪華客船で地中海クルーズの新婚旅行など、
親友ながら溜息がでるほどうらやましいなどと、
おもしろおかしく書いてあった。

隼人は、複雑な表情で携帯を閉じた。

「ようするに、この大富豪に彼女を譲ったんだ。
悠守は、大人だな」

悠守は、溜息をついて辛辣に言った。

「違うよ。ただ、僕が弱かったただけだ。
大きくて強い相手に、尻尾巻いて逃げて来ただけだよ」

悠守は、ひとり言のように小さくつぶやいた。

「幸せになってほしい。心からそう願ってるよ」

見つかったパズルのピース

優衣は、エンゲージリングを

毎日ほめることに躊躇して、

箱にしまったまま出かけることが多かった。

とくに大学に行く時などは、これ見よがしに
婚約しましたと知らせているようで、

優衣はほとんどはめることがなかった。

その日も優衣は、いつものように指輪を
箱にしまったまま大学に向かった。

夕方、龍哉が時間ができたと言って、

優衣を呼び出した。

優衣が龍哉の車に乗り込むと、

彼は突然優衣の左手をつかんだ。

「なぜ指輪をしていない？」

彼の感情を抑えた低い声に、

優衣は、叱られた子供のように

小さくなってうつむいた。

「無くしたらいけないと思って」

最後は小さな声で途切れがちになった。

龍哉は、思案顔で優衣を見つめた。

そして小さく溜息をつくと、
優衣の薬指に指を当てた。
「少しやさしい表情になって、
優衣を覗き込んでゆっくりと言った。」

「デザインが気に入らないのか？
今から、優衣の好きなものを選びに行くか？」

優衣は慌てて手を引っ込めた。

「いいえ。とても気に入っています。
これからちゃんと毎日します。ごめんなさい」

3月になって、龍哉と二人で、結婚式の会場となるホテルで、
2度目の打ち合わせをしていた。

打ち合わせを終えて、ロビーに降りてきた二人に、
一人の男性が近づいてきて、龍哉に声をかけた。

彼は龍哉の取引先の人物のようだった。

龍哉は、なにやら親しげに話しかけてくる彼をさえぎり、
優衣に向って、

「優衣、先に車に行っていてくれないか」

彼は、車のキーを優衣に渡した。

彼の車の近くまで来たとき、
ふと優衣は、片方のイヤリングが
無くなっていることに気がついた。

そう言えば、ロビーで人とぶつかりそうになったことを
思い出した。

優衣は、ロビーの入口に戻り、キョロキョロと見回した。
すぐに片隅に光っているイヤリングを見つけることができた。

優衣は、ホツとして、しゃがんでイヤリングを拾った。

彼女がイヤリングを付けていると、先ほどの男性の声が、
優衣の耳に入ってきた。

「私、先月、カナダの本社の方へ行ってきましたね。

藤沢悠守の働きぶりをこの目で見て来ましたよ。

あなたに彼を紹介された時は、正直困惑しました。

彼は、英語もできませんし、経歴もパツとしませんから。

パーフェジオンの出店許可の条件に、彼の本社勤務5年というのは、
ずいぶんと頭を抱えましたよ。ですが、彼は素晴らしい仕事ぶり
でしてね。

周りの信頼も厚いですし、今では英語もかなり上達して、驚きまし
た。

いやー、さすがにあなたの紹介してくださった人物だ」

優衣は、あの悠守のことだろうか、最初は自分の耳を疑った。

それが確信に変わった時、握っていた車のキーが、
震える手からすり落ち、大理石の床で派手な音を立てた。

優衣は、大きな音に飛び上がるようにハッと我に返り、踵を返して出口に駆け出した。

龍哉は、一番聞かれたくなかった話を聞かれたことに、無然と舌打ちをした。

「失礼」

トイ・ボックスの日本代表の男性にそう言つと、怒りを抑えきれないように、龍哉は拾った車のキーを力の限り握りしめた。

優衣は、目の前の霧が晴れたような、見つからなかった最後のパズルのピースが見つかったような、今まで気付かなかったことが、ハッキリと分かった気がした。

悠守をトイ・ボックスに紹介し、カナダに行かせたのは、龍哉だったのだと。

きつと悠守は、すべてを知った上で、カナダに行くことを決心したのだらうということも。

ホテルのエントランスを抜けた正門近くで、

優衣は、追いかけてきた龍哉に腕を掴まれた。

「優衣、待て」

優衣は、龍哉の手を振り払おうと、

体をそむけながら、涙声で責めた。

「あなたが、悠守を。悠守を」

龍哉は、優衣の手首を乱暴につかむと、強い口調で言った。

「誤解するな」

彼は、優衣の肩をつかんで、優衣を正面に見据えて辛辣に言い放った。

「確かに、トイ・ボックスに彼を紹介したのは俺だ。だが、カナダに行くことを決めたのも、君と別れると決めたのも彼だ」

優衣は、ハッと息をのんで、苦しそうに彼を見上げた。

優衣は、悲しそうに唇を噛んで、涙をためた目で、つらそうに頭を振った。

「悠守の人生を・・・あなたが・・・ひどい」

龍哉は、苛立たしげに優衣をつかんでいる手に力を込め、優衣を乱暴に引き寄せた。

「あんな男のことは忘れる」

優衣は目を見開いて顔を上げ、力いっぱい龍哉の頬を叩いた。

意表を突かれたように、力の抜けた龍哉の腕の中から逃れると、
優衣は走って門をくぐり、止まっていたタクシーに飛び乗った。

温かい夢

優衣は、こぼれおちる涙を
ぬぐいもせずに、佇んでいた。

綺麗な星空を見上げながら、

優衣は、別れて初めて悠守に会いたいと思った。

たまらなく彼に会いたかった。

ただ彼の笑顔を見たいと切に願った。

「優衣ちゃん？優衣ちゃんでしょ？」

優衣の目の前にあるフェンスの奥から、
人影が近づいてきた。

「やっぱり、優衣ちゃんね。どうしたの？」

その人は、悠守がよく連れて行ってくれた、
スポーツカイトのクラブの美咲だった。

優衣が佇んでいたのは、

悠守が昔住んでいたあの小さな家の前だった。

美咲は、すぐに優衣の悲嘆にくれる様子に気付いた。
驚いた様子で急いで、優衣のそばまで来ると、
優衣の肩をやさしく抱いた。

「とりあえず、中に入って」

美咲は、優衣の背中を押して、部屋へ招き入れた。

部屋の奥から、驚いた顔をした耕太が、出てきた。

「私たち、去年の夏に結婚したのよ。この家はね、悠守君に大家さんを紹介してもらったの」

美咲は、優衣をリビングのソファに座らせた。

優衣は、少し様子が変わったリビングを、ゆっくりと見回した。

耕太は、心配そうな顔で、湯気の立ったマグカップを持ってきた。

美咲は、そのカップを優衣の手にやさしく持たせた。

優衣の凍えた指先が、少しずつ温まって、

凍えた気持ちも、少しほぐれたような気持ちになった。

優衣は、マグカップをぼんやり見つめながら、ぼつりぼつりつぶやいた。

「私、どうしても悠守に会いたくなって。

タクシーを降りて、気が付いたらここにいたんです」

美咲は、もの思わしげな表情で優衣を見つめた。

そして、思いついたように、今夜はここに泊まりなさいよと言った。

「奥の部屋を使ってちょうだい」

と言って、優衣のマグカップをテーブルに置くと、優衣を部屋へ連れて行った。

そこには、悠守が、以前使っていた、机やベッド、本棚などがそのまま置かれていた。

優衣は、あふれ出てくる懐かしさにほほを緩めて、部屋を見回した。

ここで二人過ごしたたくさんの日々が、優衣の記憶の中に鮮明に蘇ってきた。

優衣の視線は、机の端でぴったりと止まった。

そこには、優衣がドイツで買って来た、あのサーカスのオルゴールが置いてあった。

優衣は、信じられない思いで、机に近づき、オルゴールのなかを覗き込んだ。

「悠守君が、日本を離れるとき、持っていけないからって、ほとんどの家具を置いて行ったの。好きに処分していいって言っていたんだけどね、そのオルゴールだけは、帰ってくるまで預かってくれないかって、頼まれたのよ」

優衣は、震える手でオルゴールのネジを回した。

「あなたたちが別れた訳を、悠守君はハッキリ教えてくれなかったけど、

悠守君、やさしいから、あなたのためと思って、身を引いたんじゃないかって思っていたのよ」

今夜のオルゴールの音色は、優衣にはやけに悲しく聞こえたのだっ
た。

「ごちそうさまでした」

朝日が差し込むキッチンで、美咲と耕太の3人で食卓を囲みながら、
優衣は、空になったお皿を重ねた。

「こんなおいしい朝ご飯は初めてです」

優衣が美咲にそう言うと、美咲の横に座っていた耕太が、
嬉しそうにうなずいて、

「そうだろ。美咲のご飯は、世界一なんだ。
だから、俺、結婚して5キロも太ったんだよ」

耕太は、豪快に笑った。

「えっ？5キロも太ったの？」

美咲が驚いて、耕太に顔を向けた。

「いつ、いつやー、正確に言うと、4・7キロだよ」

「5キロじゃない」

優衣は目の前の二人のやり取りを、
楽しそうに笑いながら、眺めていた。

美咲は、急に優衣に顔を向けて、
優衣の笑顔に安心したように穏やかに言った。

「もう、大丈夫なのね」

優衣はゆっくりとうなずいた。

「昨夜、温かい夢を見ました。とても温かい夢を。
悠守が、言ってくれるんです、

“僕は優衣の味方だよ。どんな時も君の味方だよ” って」

優衣はかみしめるように、ゆっくりと言った。

「私、もう大丈夫です」

優衣は顔を上げて笑顔を見せた。

ダイヤの指輪

秘書に通された龍哉のオフィスは、
全面に窓のある大きな部屋だった。

部屋の奥には、威圧感を与えるような
大きな机があった。

龍哉は優衣を見て、ゆっくりと立ち上がった。

優衣は、逃げ出したい気持ちを必死に抑えて、
震える足で近づいて行った。

机の前まで来ると、優衣は鞆の中から小さな箱を
取り出して、机の上に置いた。

龍哉は、感情を抑えこみ、目を細めて机に目を落とした。
しばらく黙って箱を眺めてから、ゆっくりと手を伸ばして箱を手
取った。

彼が、片手で開けた箱の中には、ダイヤのリングが光っていた。

龍哉は、少しの間無表情で、指輪に視線を落としてから、
パツチンとふたを閉め、優衣に顔を向けた。

「本気なのか」

優衣は小さくうなずいて彼を見上げた。

「やっと気付いたの。私、あなたに甘えていただけだって」

龍哉は、少し顔をしかめて、優衣を見つめていた。

「ごめんなさい」

優衣は、目を閉じて頭を下げた。

龍哉は、沈黙した後静かに言った。

「許してくれと言ったら？」

優衣は、一瞬目を見開いて彼を見てから、悲しそうな表情を浮かべた。

「あなたを許せないから、結婚できないわけじゃないの。きっかけだったことは、確かだけど。

でも、私分かったの、あなたを愛していないって。

今になってやっと、分かったの」

龍哉は、無然とした表情で、ただ黙って優衣を見つめていた。

「お仕事中にごめんなさい」

お辞儀をして、部屋を出て行く優衣の背中を見つめながら、

龍哉は、手の中の箱をぎっく握りしめていた。

卒業式

桜のつぼみが膨らみ始めた頃、
優衣の大学で、卒業式が行われた。

式が終わって、講堂から華やかな服装の学生が
あふれ出て、あちこちで記念撮影をしていた。

人ごみの向こうから近づいてくる龍哉に気がついた時、
優衣はまるでスローモーションのように、
そこだけゆっくりと時間が流れているように見えた。

龍哉の泰然とした雰囲気、
いつもに増して、今日は優衣を不安にさせた。

優衣の当惑した表情を見て、
龍哉は、少し微笑んで言った。

「心配するな。君を説得しに来たわけじゃない」

人影の少ない中庭まで来ると、
龍哉は優衣のはかま姿を、
しばらく憂え顔で眺めていた。

やがて優衣から視線を外すと、
慎重な声でゆっくりと切り出した。

「君に初めて会って、悠守君と付き合うことにしたと言われた時は、それでいいと思っていたんだ。それから半年ぐらいたった時、偶然君たちを見かけたことがあったね。」

君は、はじけるような幸せそうな笑顔で彼を見上げてたよ。

君があまりに幸せそうに笑っているのを見て、

ふと考えたんだ、自分の隣で、こんなふうに幸せそうに笑った女がいたんだろうかってね。

そう考えると、彼に何があるのか知りたくなった。

彼が、何を持っているのか、

彼が、どうして君をそんなに幸せそうな笑顔にさせられるのか、どうしても知りたくなった。

だから、何社かの調査会社に彼を調べさせた」

「悠守を調べたの？」

龍哉は、苦しそうにうなずいた。

「でも、何一つ納得できる報告はなかった。

その時は、履歴書に書けるようなことばかり探していたからね」

龍哉は、自嘲ぎみな口調で言った。

優衣は、彼の脆弱な部分を初めて知ったようで、

戸惑いを感じながらただ黙って彼を見つめていた。

「何も持っていない彼をどうしても認められなかった。

だから、どんなことをしても、君を手に入れようと思った。

まず、手始めにパーフェクションの着工セレモニーに招待した。

彼に直接会ってみたかったんだ。
初めて彼と挨拶したとき、決心したよ。
必ず君を奪ってみせると」

「彼のカナダ本社勤務5年を条件に、
パーフィジョンの出店許可を出すよ、
トイ・ボックスに打診したのは、
君を建設事務所に初めて連れて行った日だった」

彼は長くためらった後、囁くように声を絞った。

「両親との食事会で、君にエンゲージリングを渡したのも、
君が両親の手前断れないようにしたかったからだ。
君を罠にかけるようなことをしたよ」

龍哉は、目を伏せて、気弱な笑みを浮かべた。

「結局、最初から、悠守君に負けていると分かっていたんだろっな。
それをどうしても認められなかった、認めたくなかったんだ」

卒業式（後書き）

龍哉の告白を2つにわけることになりました。
次回につづきます。

エアーチケット

龍哉の張り巡らせた思惑に戸惑いながら、
優衣はただ黙って聞いていた。

龍哉は、片方の手をポケットに伸ばし、
何かを取り出すと、優衣の前に立った。

そつと優衣の左手を手に取ると、
優衣の薬指に指輪をはめた。

それは、悠守にもらったアクアマリンの指輪だった。

思いがけない気持ちで、優衣は深い蒼色の石を見つめた。

龍哉は、胸ポケットから細長い封書を取り出して優衣に渡した。

優衣が中を開けると、カナダの航空チケットが入っていた。

優衣は驚いて、龍哉を見上げた。

「卒業祝いだよ。謝罪を込めたね。

このままだと、君は前に進めないだろ」

「でも、今悠守がどんな気持ちかも分からないし、
それに、もしかしたら、彼に」

慌てて答える優衣をさえぎって、龍哉はピシッと言った。

「直接会って確かめてくればいい。それでもし、彼に金髪の恋人がいたら、

その指輪を突き返してきたらいいさ。もう、俺で練習済みだろ」

優衣は笑っているのか、謝ればいいのかわからずに、複雑な表情になって龍哉を見つめた。

龍哉は、くるくる変わる優衣の表情を少し微笑んで見つめていた。

すこしさみしそうに首を傾けると、優衣の頬に手を当てた。

しばらくの間、彼は何も言わずにただ優衣をじっと見下ろしていた。

ようやくつぶやくようなやわらかな口調で囁いた。

「優衣、君は俺を揺り動かした初めての人だ。自信を持って」

優衣を見つめる彼の瞳の奥に、優衣は初めてやさしい光を見たような気がした。

優衣は、遠ざかって行く龍哉の後ろ姿に、ありがとうと小さくつぶやいた。

カナダの遠い春の足音

カナダの3月は、まだ風が冷たく、春はまだもう少し先のようだった。

肌を刺すような冷たい風にも、全く気にする様子もなく優衣は、前面ガラス張りの建物に入って行った。

受付で一言二言言葉をかけてから、ソファーがならんだフロアの一角で、落ち着かない様子で、窓の外を眺めた。

穏やかな日差しが差し込み、窓にまぶしく反射していた。

優衣は最初になんて言おうかと、ぶつぶつ独り言を言いながら、思い悩んでいた。

「ごめんなさい。突然来てしまって・・・堅苦しいかな。
Hi! How are you?・・・って、なんで、英語?
うん、・・・お久しぶり!元気?・・・」

背後に人の気配を感じて、ハッと優衣は振り向いた。

そこには、飛行場で別れた時と変わらない悠守が、驚いた表情で立ち尽くしていた。

悠守の驚いた表情が、ゆっくり笑みに変わってゆき、

こぼれおちそうな笑顔になった。

二人で笑いあいながら、優衣は言葉がなくても解り合える瞬間があることを強く意識した。

笑顔だけで解り合える人がいるという幸せを心から嬉しく思った。

幸せをかみしめるように、一歩づつ近寄った。

悠守は手を伸ばして、優衣の肩にかかる髪に触れ、そつと優衣を抱き寄せた。

優衣は、心がゆっくりと満たされてゆく感じ、今になってようやく、理由の解らなかった涙の訳に気が付いたのだ。

龍哉にダイヤのエンゲージリングをはめてもらった時、空っぽな心が、悲鳴を上げて泣いていたのだと。この温もりが欲しかったからだ、今この時になってやっと気が付いたのだ。

「優衣、本物なんだね」

悠守は、割れものを触るように、やさしく優衣の背中を包み込んだ。

私は、この人をずっと探していたんだ。

あふれるような幸せを感じながら、優衣は悠守の首に腕をまわした。

カナダの遠い春の足音（後書き）

最後までお付き合いいただき、有難うございました。

ここまで読んで下さった方々、お気に入り登録して下さいました方々、一人ひとりに、深く深く感謝いたします。有難うございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2301t/>

深海の星屑

2011年6月17日11時27分発行